

南半球便り（その 81）：リズモア訪問

6 月 29 日

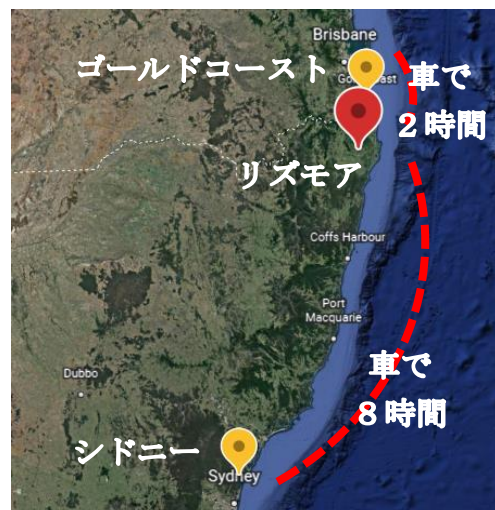
豪州を隈無く回る第三巡目の出張の第二弾は、リズモア【下記地図参照】でした。といっても、日本の方には、ピンとこないでしょうね。ニュー・サウス・ウェールズ州の最北方、クイーンズランドとの州境近くに所在する中心部人口約 1 万 5 千人、全体でも約 4 万 4 千人程度の長閑な町です。今日はその話をさせてください。



リズモア市のランタン・フェスティバルで
奈良県大和高田市の「みくちゃん」ランタンを担いだ皆さんと

1. ひと苦労

率直に言って、リズモア行きは楽ではありませんでした。キャンベラからの直行便はなし。シドニーから車で 8 時間もかかる距離。飛行機は朝 7 時発。そこで、シドニーに前泊。せっかくのシドニー滞在の機会を利用し、在留邦人の方々にお声がけして懇談をしました。



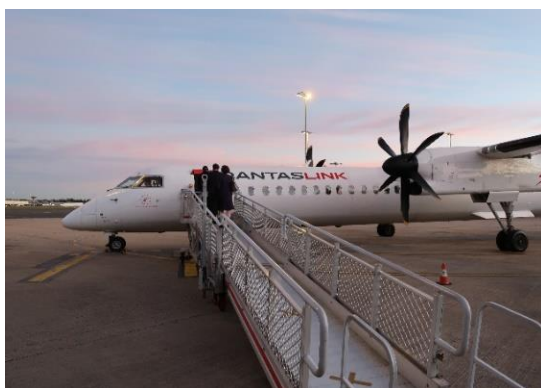
メンバーは、シドニー日本商工会議所の白井会頭（三井物産）、日本クラブのコステロ会長、日本人会の八尾会長（丸紅）に加えて、今回は文化関係で活躍されている着物クラブ・プレジデントのゲスナー女史、文化イベント主催者である J Culture Sydney 代表の平野女史、箏曲家の小田村女史、書家の矢野氏。



いずれもソフトパワーの最前線で、日夜創意工夫を重ねられている多士済々の面々です。ふだんは聞けない数々の貴重な経験談をうかがう中で、日々の仕事に立ち向かうインスピレーションをいただきました。日本をアピールするという意味で、畑は違えども、同じ方向を向いておられる方々の活躍ぶりを非常に心強く思いました。

2. リズモアと日本との縁

翌日は朝 4 時半起きで空港へ。プロペラ機でリズモア近くのバリナ空港に到着しました。



朝 7 時のシドニー発フライトに搭乗



晴天のバリナ空港に到着

実は、日本と豪州との間には、107 件もの姉妹都市・友好都市関係（101 市区町・6 都府県）が設立されていますが、その最古がリズモアと奈良県の大和高田市なのです。来年には 60 周年を迎えます。

その理由は、戦後長らく奈良に住んで日豪の和解のために尽力されたトニー・グリーン神父と弟のポール・グリーン神父の出身地だからです。こうした縁があるせいか、日本語教育も盛んで、地元のサザンクロス大学には日本語講座があるだけでなく、グリーン牧師にちなんで畳敷きの和室を備えた日豪センターが設けられています。

長らく教鞭を取ってこられたマクラレン^{だづこ}温子女史のアレンジで、同大学を訪問。教員や学生を相手に日豪関係を語るとともに、活発なパネル・ディスカッションを堪能してきました【私のスピーチは、[こちら](#)でご覧いただけます。】



参加学生との質疑応答



3. 前代未聞の洪水被害

ただし、今回リズモアを訪れたのは、これだけが理由ではありません。今年 2 月と 3 月に前代未聞の大洪水がリズモアを襲ったからです。

日本と同様、豪州には自然災害がつきもの。中でも、洪水と山火事が筆頭でしょうか。この地域でも数年に一度は洪水被害が生じてきていますが、今回はかつてない災禍をもたらしました。

地元の人によれば、町を流れるウェイルソンズ川の上流での雨量、リズモアでの雨量、同川が注ぐ太平洋での高潮、満潮といった要素が重なって、かつての洪水時の最高水位を 2.5 メートルも上回り、通常の水位よりもはるかに高い 14.4 メートルまでに上昇。町の低地部分は完全に冠水し、交通網・補給路が断たれ、5 人の方が亡くなられる悲劇になってしまいました。

クリーグ市長直々に、甚大な被害に遭った図書館、美術館、野球場などの施設を案内して頂き、有無を言わさぬ自然の圧倒的な力に慄然としました。東日本大震災などの自然災害が日本を襲った際の豪州からの心強いサポートがひととき強い印象となっているため、今回は我々がモラルサポートをする番だと思って足を運んだのです。



図書館（2階まで浸水）



野球場（芝生、2階のクラブ・ハウスも被災）



美術館（洪水時の水位を指さしている）

洪水被害に遭った野球場は、芝生のグラウンドが4面にも及ぶ、日本ではなかなか見られない恵まれた立地でした。今はバックネットや外野フェンス等が水害で崩壊している状態ですが、「2032年のブリスベン五輪の際にはサムライ・ジャパンの合宿所となることを期待している。」との市長の発言に、思わず強く頷きました。

4. 大歓待



サザンクロス大学「トニー・グリーン神父日豪センター」でのグリーン神父にまつわる展示



左から、紀谷シドニー総領事、同大で長く日本語を教えているマクラレン女史、同大カーリン学長、私、ホーガン連邦議会下院議員、クリーグ市長、隣接するバリナ市のキャドワラダー市長



同大音楽講師の皆さんによる音楽演奏



同センターには畳スペースや掛け軸なども

クリグ市長を始めとするリズモア市の関係者、サザンクロス大学関係者からは、誠に心温まる歓待を受けました。というのも、キャンベラから日本大使が訪れるのは、4代か5代に一人にとどまるからだそうです。

5. ランタン・フェスティバル

リズモア滞在の圧巻は、6月25日夜のランタン・フェスティバルでした。



市の中心部で行われたランタンのパレードでは、多くの観覧者が沿道に並んだ。

趣向を凝らしたランタンがリズモア市民に担がれてメインストリートを練り歩くのです。私は、姉妹都市の大和高田市のマスコットである「みくちゃん」のランタンを市長や紀谷シドニー総領事、平木クレア（自治体国際化協会）シドニー事務所長と一緒に担いで歩きました。

誰もが、長引いたコロナ禍での隔離・旅行制限、洪水被害からの癒やしを求めているのでしょう。例年を遙かに上回る1万5千人もの老若男女が沿道を埋め尽くしました。南十字星が煌めく夜空を背にして優しく照らし出されたランタンを大きな歓声をあげつつ飽くことなく見入るオーギー。そんな彼らの和やかな笑顔を見るにつけ、日本のお祭りに帰ったような懐かしい気持ちがこみ上げてきました。



市中心部には屋台が立ち、多くの人で長い列



フィナーレは花火

大洪水に見舞われたリズモアでは、略奪も破壊行為もなく、人々はぐっと歯を食いしばり互いに励まし合って凌いできたとのこと。自然災害に見舞われた際の日本同胞の静かで粘り強い対応を想起し、改めて日豪の共通項についての感慨を深めた夜となりました。



クリーグ市長からいただいたピンバッジ

市中至る所で赤いハートの垂れ幕が掲げられている。

山上信吾